研究報告

「生活科」の「気付き」と「森のようちえん」との関わり

柳原高文*
（名寄市立大学保健福祉学部社会保育学科）

キーワード：森のようちえん、生活科、気付き、保育内容（環境）、森林環境教育

1. はじめに

「森のようちえん」の成り立ちは、1950 年代中頃デンマークで、「子どもたちに幼い頃から自然と触れ合う機会をあたえ、自然の中でのびのびと遊ばせたい」という願いを持つ一人の母親が、自分の子どもたちを連れて毎日森に出かけていったことがきっかけで始まったと言われている。我が国の「森のようちえん」の形態は、保護者を含む自主的なグループが通年で運営する自主保育の形式、園外活動の一部に取り入れている幼稚園や認可保育園（所）、自然学校や任意型団体が行事で実行するなどに分類することができるが、その活動形態は様々で、幼児を自然の中で保育する活動を「森のようちえん」と表記していることが多い。

幼稚園教育要領「身近な環境とのかかわりに関する領域『環境』」では、「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」と示している。これを「森のようちえん」の活動にあてはめて考えると、日々変化している森という自然環境で、好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養うことである。さらに、「ねらい」では、「(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。」「(2)身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。」とある（文部科学省 2018）。

筆者は 2017 年から、北海道名寄市東保育所の年長園児に、市内のレクリエーション施設である健康の森で主に森を歩きながら出会える自然を観察する「森のようちえん」を行っている。森をはじめとする自然の中で幼児たちは、自らの五感を使って観察しているが、不思議なことを発見すると、引率者や仲間に声をかけ、その不思議を分かち合う行動が多く見られる。さらに、手の届かない場所にあるカタツムリを見つけると仲間と協働によって手に入れる方法を考えていた。この行動は、文部科学省が新しい形の学習方法として取り上げているアクティブ・ラーニングの基礎的な活動ではないかと考えられる（柳原 2018）。アクティブ・ラーニングとは、「課題の発見と解決に向けての主体的・対話的に深く学ぶ学習」であるが、森という多面的な環境だからこそ幼児たちに発見から、願望、課題が生まれてくるのではないかと考えられる。このように幼児たちは森で主体的に活動しているが、その主体性から「気付き」が生まれ、小学校の教科である生活科へのつながりができるのではなかと考えた。生活科指導要領解説によれば、「気付くとは、児童一人一人に、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等についての気付きが生まれるということである。生活科でいう気付きとは、対象に対する一人一人の認識であり、児童の主体的な活動で生まれるものである。」と明記している（文部科学省 2017）。この「気付き」を中野（1992）は、「『気付き』は、他教科の観点では、知的・理解に近いものであるとしている。ではなぜ、知識・理解ではなく『気付き』なのかということについて、生活科にあっては、教えられて受動的に分かるということではなく、自ら主体的に環境と関わり、その中で気付き、分かることを大切にしたいということである。すなわち、主体的な分かり方こそ、気付きなのである。」と「気付き」には主体性が必要と示している。福士（2014）によれば、「気付きとは、生活科の活動をとおして児童一人ひとりが、対象との関わり合いの中から知的なまたは情意的な認識を獲得することである。理科と

* 責任著者
柳原高文　salix@nayoro.ac.jp

の関係で言えば、対象がもつ自然の不思議さを発見したり、自然をいとしく思う気持ちをもったりすることである。科学的な見方や考え方を学ぶ理科への接続を考慮すると、この生活科での気付きがその基礎になっているのである。」と論じている。さらに、塩原ら（2002）は、「気付き」を「原体験の積み重ねの中から、事象・事物を比較したり、これらの理（ことわり）や因果関係を発見することができるようになり、気づきが生まれる、これが「科学的な見方」の芽生えである。」と論じている。同じく、關（2008）は、「現在、生活科の授業は、学習活動が体験だけに終わるのではなく、活動や体験を通して得られた気づきを質的に高める指導の充実や、児童の知的好奇心を高め、科学的な見方・考え方の基礎を養うための指導の充実が求められている。」と論じている。このように、「気付き」は生活科と大きく関わっていることが分かる。そして、朝倉（2004）は「気付きとは、認識の芽であり知識・理解に発展すること」と述べ、「気付く」の諸側面を表１のように示している。

表１　生活科における「気付く」の諸側面

誰が（気付くのか）	主体	学習者である子ども
何に対して	対象	人々　社会　自然　生活　自分自身　自分とのかかわり
どんなことに	内容	事実　関係　疑問　感情　感覚
いつ	時間	生活科の授業時間　（授業時間外）
どこで	場所	生活科の学習場所　（不特定の場所）
何によって・どのようにして	方法・活動・過程	具体的な活動・体験　思考　話し合い　（任意の活動）
どのくらい	程度	広狭　深浅

（出典）朝倉淳（2004）生活科における「気付き」の概念についての基礎研究

この朝倉(2004)と「森のようちえん」における幼児の「気付き」との関連を考えると、主体＝幼児、対象＝自然、内容＝自然の大きさ・美しさ・不思議さ、時間＝森のようちえん活動時間、場所＝森、方法・活動・過程＝体験・分かち合い、程度＝広浅、深浅となる。この「気付く」が「生活科」において重要視されている「自然への気付き」にどのように関連しているのかを、生活科指導要領解説（文部科学省 2017）の生活科の内容において、内容(5)季節の変化と生活：知識及び技能の基礎「自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに気付く」、内容(6)自然や物を使った遊び：知識及び技能の基礎「その面白さや自然の不思議について気付く」、内容(7)動植物の飼育・栽培：知識及び技能の基礎「それらは生命をもっていることや成長していることに気付く」と示している。この３つの気付くに「森のようちえん」の活動がどのように関わっているのかを筆者が参与観察している事例から考察することを考えた。

2. 方法

北海道名寄市のレクリエーション施設である、健康の森で 2017 年から 2019 年に行なった、東保育所の年長園児の「森のようちえん」（表 2）で、幼児の行動や言動から、生活科の内容にある３つの「気付く」に当てはまる代表的な事例を各 4 項目取り上げ考察してみた。

調査を行なった健康の森は、市の指定管理者が管理する、多くの樹種で構成される約 200ha の森林である。小川が流れ込む池がありヤゴの観察など水生生物の観察もできる。早春にはエゾエンゴサク、ミズバショウなど多くの植物が見られ、秋にはイタヤカエデやオオモミジなど紅葉の美しい植物、多種多様のキノコの観察ができる。クマゲラやオオアカゲラ、オオルリなど貴重な野鳥だけではなく、ハイタカなどの猛菌類の姿を見ることができる。健康の森に生育する主な樹木は表 3 である。この、「森のようちえん」での幼児の行動を 2 名の参与観察者がカメラなどを用いて記録し、活動後に記録を見ながら幼児の言動、行動の分析を行った。なお、参与観察者 2 名は、森林インストラクター（一般社団全国森林レクリエーション協会認定）の資格を持ち、幼児の気付きから生まれる植物、生き物の質問に答えることができた。

また、東保育所の年長園児は2017年22名、2018年10名、2019年16名で、2019年6月26日、9月5日の活動は名寄市日章地区神社山で中名寄小学校の児童と行なった交流活動である。

表2　「森のようちえん」の活動内容

2017年度		2018年度		2019年度	
活動日	活動内容	活動日	活動内容	活動日	活動内容
8月4日	生き物探し	4月25日	早春の森歩き	5月22日	春の森歩き
8月24日	生き物探し	5月23日	春の森歩き	6月26日	森の宝探し
9月14日	秋の森歩き	6月27日	雨の森歩き	7月16日	生き物探し
9月29日	秋の森歩き	7月18日	生き物探し	8月21日	生き物探し
10月31日	初冬の森歩き	8月8日	生き物探し	9月5日	森の樹名板設置
3月13日	残雪の森歩き	9月12日	秋の森歩き	10月15日	秋の森歩き
		10月3日	秋の森歩き		
		11月14日	初冬の森歩き		

表3　健康の森の主な樹木

No.	標準和名	学名
1	アズキナシ	*Aria alnifolia*
2	イタヤカエデ	*Acer pictum Thunb. subsp. mono*
3	エゾマツ	*Picea jezoensis*
4	エゾヤマザクラ	*Cerasus sargentii*
5	オオモミジ	*Acer palmatum var. amoenum*
6	オニグルミ	*Juglans mandshurica var. sachalinensis*
7	カツラ	*Cercidiphyllum japonicum*
8	キタコブシ	*Magnolia kobus*
9	ケヤマハンノキ	*Alnus hirsuta*
10	コシアブラ	*Eleutherococcus sciadophylloides*
11	コマユミ	*Euonymus alatus f. ciliatodentatus*
12	サルナシ	*Actinidia arguta*
13	シナノキ	*Tilia japonica*
14	シラカンバ	*Betula platyphylla*
15	ツタウルシ	*Toxicodendron orientale*
16	ナナカマド	*Sorbus commixta*
17	ノリウツギ	*Hydrangea paniculata*
18	ハイイヌガヤ	*Cephalotaxus harringtonia var. nana*
19	ハウチワカエデ	*Acer japonicum*
20	ホオノキ	*Magnolia obovata*
21	ミズキ	*Cornus controversa*
22	ミズナラ	*Quercus crispula*
23	ミヤマガマズミ	*Viburnum wrightii*
24	ヤマブドウ	*Vitis coignetiae*

3. 結果と考察

森のようちえんでの幼児の行動・発言から次の３つの気付くについて、事例をもとに考察した。

１）自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わることに気付く

・森に咲く花の様子から季節の移り変わりに気付く

2018 年 4 月 25 日早春の森歩きでは、残雪の中に咲くフクジュソウ、エゾエンゴサク、ミズバショウなどを見つけ、幼児たちはその美しさに気付いていた。同年 5 月 23 日の春の森歩きでは、ニリンソウ、クルマバソウ、オオバナノエンレイソウなどが観察でき、咲く花の移り変わりに気付いていた(図 1)。フクジュソウの花の黄色がきれいなこと、ロウ細工のような花びらの形から太陽の光を集めて、花の中を暖かくし、虫に来てもらう工夫をしていることを知り、幼児たちは花の内部に指を入れ温度を確かめていた。このことから、花の形や色の違いの認識が生まれ、季節によって移り変わる植物への気付きが深まったと考えられる。

・樹木の葉を展開する時期の違いに気付く

2018 年 5 月 23 日春の森歩きでは、葉を茂られている樹木、まだ葉が展開していない樹木など、幼児たちはその樹種による葉の展開の様子が違うことに気付いていた。2019 年 5 月 22 日春の森歩きでは、イタヤカエデの新緑が美しく、幼児たちはしばらくその場に座り青空を背景にした萌葱色の葉を観賞していた。森歩きの後半で、ヤチダモの葉が全く開いていないことに気付いた幼児は、早く葉を出す樹もあれば、のんびりやさんで、ゆっくりと葉を開く樹もあること、人も樹も同じでどれもいいねと、自分たちのくらしと森の樹木のくらしを対比させることで気付きを深めていた。

・植物の花から実になる様子に気付く

2018 年 7 月 18 日、2019 年 7 月 16 日生き物探しでは、活動開始場所にあるオニグルミの樹を観察し、小さなクルミの実がふくらんできていること、オオバナノエンレイソウの大きくなった種子、ミズバショウのトウモロコシのような種子に幼児たちは気付いていた。2018 年 7 月 18 日、2019 年 7 月 16 日生き物探しでは、紫色に色づいたクワの実を、2019 年 10 月 15 日秋の森歩きでは赤く色づいたミヤマガマズミの実を美味しく食べ、花から実になり食べられる植物が有ることに幼児たちは気付いていた。同じ樹を観察することで、幼児たちは花の咲いていた様子を記憶に残している。その花が終わり実になり色づき、ふくらんでいく様子を観察し、食することは、味覚を使って体験することから、幼児たちの気付きが深まったと考えられる。

・植物の葉の色の変化に気付く

2017 年 9 月 29 日、2018 年 10 月 3 日、2019 年 10 月 15 日秋の森歩きでは、オオモミジの美しく色づいた葉や多くの落ち葉を拾い集め、その色の美しさをわかち合った。黄色や赤色の樹木の葉、茶色になり葉を落とす樹木などがあることに幼児たちは気付いていた。幼児たちは、森には赤色や黄色、茶色、緑色の葉など、色々あるから美しいということを知り気付を深めていた（図 2）。

図 1 森の花を観察する幼児たち

図 2 色づいた葉を探す幼児たち

２）その面白さや自然の不思議について気付く

・葉の大きさやその形の面白さに気付く

2019 年 8 月 21 日生き物探しでは、ホオノキの落ち葉でお面を作り楽しんでいた幼児がいた(図 3)。2019 年 9 月 5 日森の樹名板設置では樹の種類によって葉の形が異なることに幼児たちは気付いていた。森の樹名板設置は小学生との交流活動で、小学生が樹名板を設置する樹木の特徴を話し、それを聞いた幼児が樹を当てるというクイズ形式の活動であった。小学生のヒントである「クリスマスツリーのような葉っぱ」や「卵のような形の葉っぱ」など、そのヒントから木の葉を想像して見つけていく活動から、幼児たちの葉の大きさや形の面白さを知り、気付を深めていた。

・植物の種子の飛ぶ様子の面白さに気付く

2018 年 10 月 3 日秋の森歩きでは、オオバボダイジュやイタヤカエデの種子を投げ、その落ちる様子を楽しんでいた。2019 年 10 月 15 日秋の森歩きで幼児たちは、オオウバユリの種子の数の多さやその飛ぶ姿を楽しみ、その面白さに気付いていた。オオバボダイジュの種子は、へらの様な羽根を持ち、クルクルとゆっくり回転しながら落ちてくるが、イタヤカエデの種子はプロペラの様な羽根を持ち、早く回転しながら落ちてくる。幼児たちはその両方の種子を投げ比べることで、その気付を深めたと考えられる。

・植物の実の大きさやその形の違いの面白さに気付く

2018 年 10 月 3 日、2019 年 10 月 15 日秋の森歩きで、たくさんのドングリを拾った幼児たちは、その大きさや形が様々であることの面白さに気付いていた(図 4)。たくさんのドングリを拾い、大きなドングリや小さなドングリなどを出し合う、ドングリじゃんけんを行い、同じミズナラのドングリでも様々な形があり、どれも良いという多様性の楽しさに触れることで、幼児たちは、気付きを深めたと考えられる。

・花や木の葉の香りに気付く

2019 年 5 月 22 日春の森歩きで、幼児たちはキタコブシの花びらの香りの良さに、2019 年 8 月 21 日生き物探しで、幼児たちはオオバボダイジュの花の香りの良さに、2017 年 9 月 29 日、2018 年 10 月 3 日、2019 年 10 月 15 日秋の森歩きで幼児たちはカツラの落ち葉の香りの良さに気付いていた。このように、幼児たちは嗅覚を使って観察することで、その気付きを深めたと考えられる。

図 3 ホオノキの葉で遊ぶ幼児

図 4 色々な形のドングリを見つけた幼児たち

３）それらは生命をもっていることや成長していることに気付く

・成虫のチョウやトンボの飛ぶ姿、捕獲したチョウやトンボの翅を動かすときの力強い様子に気付く

2017 年 8 月 24 日、2018 年 7 月 18 日、2018 年 8 月 8 日、2019 年 7 月 16 日、2019 年 8 月 21 日生き物探しで幼児たちは、捕まえたトンボやチョウを手で持ち、その翅を動かす時の力強い様子に気付いていた(図 5)。健康の森では多くの種類のトンボやチョウが見られるが、オオルリボシヤンマ、オニヤンマ、ミヤマカラスアゲハなどの美しく大きなトンボやチョウを持つことで、その力強い動きを感じ、それらの生き物も生きている

んだということを知り、気付を深めたと考えられる。

・チョウやトンボなどの昆虫が姿を変えながら成長していく様子に気付く

2017年8月24日、2018年7月18日、2019年8月21日生き物探しで、幼児たちは水草や水辺の枝についたヤゴの脱け殻を見つけることで、昆虫が姿を変えながら成長していくことに気付いていた。森の小川ではオニヤンマが飛び交い、その小川の川底に網をいれると大きなヤゴが捕獲できた。それはオニヤンマのヤゴで、やがて空を飛ぶオニヤンマになることを知ることで、幼児たちは昆虫の成長について気付を深めていたと考えられる。

・生き物の糞や食痕からその生命活動に気付く

2017年8月4日生き物探し、2018年4月25日早春の森歩き、2019年5月22日春の森歩きで、幼児たちはリスがクルミの実を食べた後の割れた殻、ネズミが丸く穴を開けて食べた後の殻、2019年5月22日春の森歩きで見つけた、クマゲラがカラマツに開けた穴、2019年10月15日秋の森歩きで見つけたエゾタヌキの大量の糞から、生き物の生命活動に気付いていた。クルミの殻集めは楽しく、クマゲラがダイナミックに開けた穴や木くずが飛び散っている後、エゾタヌキの溜め糞など、その印象に強く残る生き物の生命活動から幼児たちの気付き深まったと考えられる。

・生き物の季節によるくらし方に気付く

2019年10月15日秋の森歩きで、幼児たちはエゾリスが冬の蓄えとして樹の実を集めている姿を見た(図6)。その様子から、幼児たちは生き物の季節によるくらし方が異なることに気付いていた。冬眠しないエゾリスは冬の間を過ごす食料が必要であることを、目の前でその姿を見ることで強く印象に残り、気付きを深めたと考えられる。

図5 チョウを手に持つ幼児

図6 冬支度するエゾリスを見つけた幼児たち

4. おわりに

生活科指導要領解説では、気付きを深めることについてこう記している。「一人一人の気付きなどが表現されることによって確かになり、交流することで共有され、そのことをきっかけとして新たな気付きが生まれたり、様々な気付きが関連付けられたりする。例えば、比べたり分類したりすることによって、ある気付きと別の気付きとの共通点や相違点、それぞれの関係や関連が確認されたときになどに、気付きの質が高まったということができる。自分自身や自分の生活について考え、表現することにより、気付きの質が高まり、対象が意味付けられたり価値付けられたりするならば、身近な人々、社会及び自然は自分にとって一層大切な存在になってくる。このような『深い学び』の実現こそが求められるのである。」(文部科学省2017)。幼児たちは、森のようちえんの活動で、自然の不思議に気付き、「興味・関心」、「驚き」、「楽しさ」、を体験し、「同じものを見つけたい」、似ているものを見つけたい」、「もっと見つけたい」などの気持ちを喚起させていくことが大切であると考えられる。このような体験を重ねることで、主体的に気付きを深めていくことができるようになる

と考えられる(栁原 2018)。森のようちえんにおける、幼児のこれらの気付きが、質を高め、深めていくことで、「生活科」において重要視されている「自然への気付き」に強く関わっていくと考えられる。

引用文献・参考文献

文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説 生活編　日本文教出版株式会社

文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説　株式会社フレーベル館

朝倉淳（2004）生活科における「気付き」の概念についての基礎研究 日本教科教育学会誌 第26巻 第4号

塩原孝茂・土井進(2002) 生活科における自然体験の意義と改善の方向 信州大学教育学部附属教育実践センター紀要教育実践研究 No.3 2002

關浩和(2008) 教育課程における生活科の存在意義 社会系教科教育学会　社会系教科教育学研究」第20号

中野重人(1992) 「生活科の学習指導と評価」 初等教育資料No.570 東洋出版社

福士顥士(2014) 小学校生活科における「気付きの質」に関する一考察 川村学園女子大学研究紀要 第25巻 第2号

栁原高文(2018) 「森のようちえん」における幼児の「アクティブ・ラーニング」および「生活科」との係り　名寄市立大学「紀要」第12巻